

ミステリ読書案内

2023. 5. 15 発行元

第477号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

高村 薫の代表作

重厚で強烈なインパクトを持った作品を仕上げる高村薫の代表作を取り上げる。いずれも日本のミステリ史に名を残す大傑作。『このミステリーがすごい!』等年間ランキング第一位に輝く作品が二つ…。

ミステリの枠を越えて…

正直に言えば、私は2000年以降の高村薫の作品は読んでいない。元々、作者は「ミステリ」という「枠」をそれほど意識していなかったと思う。2000年以降は「枠」から脱した外側の世界に進んでいると受け止めている。「枠」に拘って読んできた私には枠外の作品まで手を広げる余裕はない。

と言いながら、その後の高村薫の新聞投稿などを読むと、ミステリに関係のない文章であっても共感できるものが多い。考えていることが「すごい!」と思わせられるのだ。

「ミステリの枠」に拘らずに書くのが作者の本来の姿だと思う。

高村作品についてよく「ハードボイルド」という表現で語る人がいるけれども、私は作者が「ハードボイルド」と認識して書いているとは思えない。緻密で硬質な文章。登場人物の行動と会話で話を進め、「ああかもしれない、こうかもしれない…」という揺れる内面描写を一切排除した描き方はハードボイルドに通じる部分ではある。これは戦後の海外小説の流れを受けている言った方が良いのではないかと解釈している。私はその意味で高村作品の文章表現に大いに賛同する。

NO.3「黄金を抱いて翔べ」

1990年新潮社。日本推理サスペンス大賞受賞作品で、これが高村薫のデビュー作ということになる。最初の作品からしっかり考え抜かれた強固な構成になっている。

大阪を舞台に、銀行から金塊を強奪しようとする計画を立てる6人の男たち。冒頭から登場する主人公の位置にいる幸田、そして計画の立案者の北川、その弟の春樹、コンピューターに強い野田、爆発物のモモ、機械整備の岸口老人。それぞれの行動が丁寧に描かれていく。銀行の徹底した防御網を崩すための大がかりな計画。隙のないように組み立てられて、いざ実行へ。6人の人物像がひしひしと迫ってくる描き方が物語を引き締める。高村薫は第一作から凄みを感じさせてくれる。

NO.1「レディ・ジョーカー」

1997年毎日新聞社。『サンデー毎日』に連載した

ものを大幅改稿して単行本にしたもの。二段組み400ページ以上の上下巻。超大作。現実の世界で起きた「グリコ・森永事件」が下敷きになっている。社会の在り方に作者・高村薫が問いかけるものとは何か…。

最初に出てくるのは昭和二十二年に書かれた「怪文書」。日之出麦酒株式会社宛てに出されたもの。戦地から復員した後、被差別部落出身という理由で解雇された岡村清二という元社員から長々とした手紙。そして第一章は「一九九〇年」となり、その岡本の弟の物井清三を中心にした人達の現状が語られる。物井は薬局の老店主をしている。その物井の周りに競馬仲間の半田、高、布川などがいる。物井の孫が日之出麦酒の入社試験を受けた後に交通事故で亡くなった出来事が説明される。その事故の背後にあるのは…。第二章は「一九九四年」で、いよいよ大会社である日之出ビールの社長・城山の誘拐事件がスタートしていく。犯人グループは「レディ・ジョーカー」と名乗り、単純な誘拐ではなく、日之出ビールの裏金に注目し、要求に応じなければビールに毒を入れると…。捜査に当たる合田刑事、別の闇組織も動き出して…。複雑な様相を呈していく…。

No.2「マークスの山」

1993年早川書房。高村薫の第五作になる。直木賞受賞作となり、一気に名を広めることになった作品。警視庁捜査一課七係の合田刑事が初めて登場する。単行本を見ると二段組み、440ページでかなりの大作であることがわかる。基本的には「警察小説」の分類になる。

内扉を開くと目次の裏側に示されるのは北岳(白根山)付近の地図。南アルプス林道から電源開発道路と呼ばれる道が伸びていて、登山道の入口であり、最初の場面の舞台となる場所である。短いプロローグのようなものがある。ここは非常に曖昧で、かすかな雰囲気作りになっている内容。続いて「昭和五十一年秋」となり、前奏部分が始まる。道路修復工事に携わっていた岩田という男が酒に酔った意識混濁の中で、未明に下山してきたらしい登山客をスコップで殴り殺した事件が発生。その話の中で、その少し前に近くで起きた夫婦心中事件と残された少年の話題が出てくる。次の区切りは「昭和五十七年」になっていて、ある精神病院らしき所である若者の様子が語られる。「平成元年」に電発道路近くで土の中に埋められていたらしい白骨死体が発見される。そして「平成四年」で、ついに「殺人者マークス」が目覚める事になるのだ…。連続の…。